

書 評

株式会社教育社 (1982年7月25日第1刷)

千田 広志 著

「エネルギー産業界」

評者 萬 昌 夫*

Masao Yorozu

1973年の第一次石油ショックから10年、この間、石油価格の急騰、石油の安定供給に対する不安、その結果としての省エネルギー、石油代替の化石エネルギー、新エネルギーの技術開発・導入の促進と、エネルギーをめぐる情勢の変化は目まぐるしいものがあった。

このような情勢を反映して、エネルギーに関する著書は概論書から専門書まで数多く出されたが、エネルギー産業問題に対する適当な入門書となると、“帯に短し、たすきに長し”の感がある著書が多い。

その中で、本書はエネルギー問題をエネルギー産業の観点からバランス良く簡潔にまとめてあり、格好の入門書になっている。また、多くのデータ、図表が盛り込まれており、エネルギー問題の専門家にとっても手頃なハンドブックでもある。

本書は第一章でエネルギー産業の概観を述べた後、石油産業、LNG・LPG産業、石炭産業、原子力産業、新エネルギー関連産業、省エネルギー関連産業の六つの産業について、各産業の歴史、需要動向、関連産業の動向等についてまとめてある。この六つの産業の中で、新エネルギー、省エネルギーに関しては、技術開発の面では興味ある課題であるが、2000年時点でも供給シェアは5%程度に過ぎないとして、石油、LNG、石炭等の化石エネルギー及び原子力に重点を置いて論じている。

まず第一章では、エネルギーの定義から始まり、エネルギー利用の歴史、エネルギーと政治の関係、世界及び日本のエネルギー需要の推移と見通し、今後のエネルギー産業の動向といった項目が要領良く記述されている。この章だけでエネルギー問題の全体を鳥瞰できるようになっている。特にこの章では80年代のエネルギー産業の市場規模、投資規模についてデータを挙げて予測を行っているのは注目される。

第二章では石油産業を取り上げ、七大メジャー体制確立の歴史とその動向、わが国の石油精製、販売会社

のグループ別の体質、業績動向、石油の需給動向の推移と見通し等について述べている。また、石油開発に関連した機器・サービス産業についても実績のある企業・技術の紹介がなされている。

第三章ではLNG・LPGについて、その特徴、需給状況、LNG開発計画、関連産業の動向について解説している。

第四章では石炭が取り上げられ、石炭産業の歴史、需給見通しが述べられ、さらに、石炭火力発電について、公害防止技術、流動床燃焼、COM等の新技術についての解説と関連企業の紹介がなされている。

第五章の原子力産業では、原子力の歴史と原子炉の原理について概説している。また、世界のウラン開発、濃縮、再処理の状況・将来計画及びわが国の原子力産業の現状、核燃料サイクル確立のための技術開発の状況についてまとめている。

第六～七章では、新エネルギー、省エネルギーが取り上げられている。新エネルギーでは石炭液化・ガス化、オイルシェール・オイルサンド、地熱、太陽エネルギーについて開発の現状と見通し、関連企業の動向が述べられている。

省エネルギーについては、わが国の省エネルギー進展の背景、今後の省エネルギーの動向、ムーンライト計画等の記述がある。

以上、本書は新書版ではあるが、内容的にはエネルギー問題を網羅していると言える。見方によっては若干説明不足の点が感じられようが、内容の量と紙数の面から止むを得ないであろう。欲をいえば、各エネルギー産業間の競合関係等についても論じてもらいたかった。

しかし、本書は最新のデータを豊富に用い、エネルギー産業の全体を基本要項から要領良くまとめてあり、エネルギー産業の現状を知るには最も適切な著書である。

* ㈱三菱総合研究所産業技術部長

〒100 東京都千代田区大手町 2-3-6 タイムライフビル